

宮廷叙事詩人におけるいわゆる古語の扱いについて

須 沢 通

1 ドイツ中世盛期の宮廷叙事詩人たちの言語が、超地域的な文学的共通語（いわゆる宮廷詩人語）の傾向を示していたこと、さらにこの言語が表現法の洗練された宮廷の様式の形成のためにフランス語を中心とした多くの宮廷外来語を借用し、逆に民衆叙事詩（Volks-epos）で広く用いられた古いことばを意図的に避けたことは従来の研究によって指摘されるところである¹⁾。たしかに中世盛期の宮廷叙事詩には民衆叙事詩で広く用いられた特定の単語はもはや見られない。たとえば中世の代表的な民衆叙事詩「Das Nibelungenlied」（9516行）²⁾に見られる bouc（装身具としての腕環）、brünne（鎧—特に前胴—）、vriedel（男性の恋人、夫）は Hartmann の「Erec」（10191行）³⁾、「Gregorius」（4006行）⁴⁾、「Der arme Heinrich」（1544行）⁵⁾、「Iwein」（8166行）⁶⁾、Wolfram の「Parzival」（24812行）⁷⁾、および Gottfried の「Tristan」（19554行）⁸⁾においては、すでに古風な名称としてその用例を見ることができない。以下表中の（ ）の中の数字はその項の用例数のうち押韻語の用例数を示す。また詩人および作品の配列は詩人による作品の成立年代順である。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
① bouc	9(0)	0	0	0	0	0	0
② brünne	15(0)	0	0	0	0	0	0
③ vriedel	4(0)	0	0	0	0	0	0

このほかに gër（投げ槍）、wine（愛する人、夫、妻）、形容詞の wætlich（美しい）も、宮廷叙事詩ではわずかな例外を除き、古風な表現として避けられている。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
④ gër	26(4)	0	0	0	0	1(1)	0
⑤ wine	7(0)	0	0	0	0	1(1)	0
⑥ wætlich	50(0)	4(2)	1(0)	0	1(1)	0	0

民衆叙事詩では騎士によっても使用された gër（投げ槍）は、宮廷叙事詩ではもはや騎士の武器とは認められていない。この単語は「Parzival」で唯一、愛の神アモールが手にする投げ槍をあらわす箇所に見られ、押韻語を形成している。

Parzival 532, 13 als tuot des hêrn Amores gêr
 <アモール殿の投げ槍にしてもそうだ>

wine は「Parzival」では少年バルツィヴァールをさし、民衆叙事詩における特定の人の恋人、もしくは夫、妻をあらわすのではなく、広く「人気者」の意で用いられている。ここでも押韻語を形成している。

Parzival 228, 6 sus saz der minneclîche wine
 <このように愛らしく好意を抱かれた少年は座っていた>

wætlich も形容詞として「Das Nibelungenlied」で多く用いられているが、Hartmann の初期の叙事詩「Erec」で4例、「Iwein」においては1例見られるにすぎない。

Iwein 4374 f. und sach engegen im gân / sehs knappen wætliche
 <そして6人の美しい小姓が彼に向かってやって来るのを見た>

しかし、宮廷叙事詩における古いことばの忌避を示す代表的な例として広く挙げられる⁹⁾ 中高ドイツ語 (Mhd.) の四つの名詞 helt, degen, recke, wigant (いずれも「勇士」「優れた騎士」の意味。フランス語 chevalier からの借用造語 mhd. ritter によって次第に駆逐される) の用例数を中世盛期の宮廷叙事詩人たちにおいて比較してみると、詩人たちのこれらの単語に対する態度が一樣ではないことがわかる。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
⑦ helt	299(2)	1(1)	1(1)	0	4(3)	116(6)	1(0)
⑧ degen	257(113)	11(7)	0	0	4(1)	64(12)	0
⑨ recke	334(0)	0	0	0	0	4(3)	0
⑩ wigant	2(0)	0	0	0	0	19(19)	0

「英雄」「勇士」の活躍、闘争をテーマとして扱い、「英雄叙事詩」(Heldenepos)ともよばれる「Das Nibelungenlied」では wigant を除く単語がいずれも数多く使用されているのに対して、宮廷叙事詩人のうち Hartmann と Gottfried ではこれらすべての単語に対する拒否的な態度が見られる。これと対照的に Wolfram ではいずれの単語も比較的自由に用いられている。

helt は12世紀にドイツ語圏の北西部から高地ドイツ語に入った単語¹⁰⁾で、用例数の差はあるもののここでとりあげたすべての詩人によって用いられ、「武勇に優れた騎士」をさす。この単語は Wolfram では比較的自由にかつ広い範囲の騎士をあらわすのに対して、Hartmann では用例数も少なく、「高い徳を有し、騎士としての最高の榮譽をになう勇士」をさすのに限定されている。

Erec 1734 f. sitzen ensamt sô manegen helt / von ganzen tugenden ûz erwelt
 <—アルトゥースのもとに—かくも多くの選り抜きのすべてに優れた騎士たちが集い座っているのを……>

Iwein 3249 f. er was ein degen bewæret / und ein helt unerværet
 <彼(イーヴェイン)は正真正銘の勇士であり勇猛果敢な騎士であった>

Parzival 169, 15 dô gienc der helt mit witzen cranc

<そこで知恵の乏しい勇士は出かけて行った>

これに対して Gottfried では次の1例、すなわちトリスタンに倒されたモルガーンの復讐をうたえる箇所に helt の用例が見られる。

Tristan 5486 f. nu zieren helde, kêret zuo / von steten und von vesten

<さあ、立派な勇士たちよ、町から城砦から来たれ>

degen は「冒険心にかられ、大胆で、勇敢な戦士」をさし、Wolfram ではほとんどの用例で、その勇猛心を強調するための付加語形容詞を伴って用いられる。

Parzival 747, 15 ez warf der küene degen balt

<この勇猛果敢な勇士（フェイレフィース）はそれを投げ捨てた>

Hartmann においてもこの単語は「Erec」で11例、「Iwein」で4例見られ、それぞれ主人公エーレク、イーヴェインを中心とした「すべてに優れ、冒険心にかられた猛き勇士」をあらわしている。

Erec 5498 f. und als Êrec der degen balt / ersach daz er sin engalt

<そして果敢な勇士エーレクは、この男が自分のために被害を受けているのを見た時>

これに対して他の二つの単語 recke と wigant は Hartmann と Gottfried では全く見られず、Wolfram においてもその用例のほとんどが押韻のために用いられているにすぎない。特に wigant は1200年頃には古風なことばとみなされ、遅くとも13世紀末には死滅したと考えられる¹¹⁾。この単語は「Das Nibelungenlied」でもわずかに2例が見られるにすぎないが、Wolfram はこれを押韻語として積極的に利用している。

Parzival 35, 29 f. Daz begunde dem recken / sine brust bêde erstrecken

<このことは勇士（ガムレット）の胸の腹を脹れ上がらせた>

Parzival 456, 23 f. Parzivâl der wigant / erbeizte nider al zehant

<勇士バルツィヴァールはすぐさま馬から下りた>

2 上記⑦～⑩の名詞の用例に見るように、宮廷叙事詩人のうち Wolfram はいわゆる古語を比較的自由に使用している。以下に民衆叙事詩に広く見られる単語で、Hartmann および Gottfried においてその使用が控えられているのに対して、Wolfram で依然として積極的に用いられる単語をいくつか見てみる。

ellen (勇力、勇ましい心)、küene (勇敢な) は Hartmann, Gottfried でもわずかではあるが用例を見ることができる。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
⑪ ellen	29(0)	6(0)	1(0)	0	1(0)	67(3)	1(1)
⑫ küene	305(0)	3(0)	0	0	2(0)	47(2)	1(0)

ellen は「Das Nibelungenlied」では「勇力」、「剛勇」をあらわすが、宮廷叙事詩人たち

においては「勇敢な心」を示し、多く kraft「(勇敢な心によってひきおこされる) 優れた力」と対置される。

Nibelungenlied 55,3 daz mac sus erwerben mit ellen dâ min hant
 <その場合こうしてわたしは力づくでもそれを獲得することができる>

Iwein 2999 wan daz gap im ellen unde kraft
 <なぜならそれ(心)が彼に勇氣と優れた力を与えたのだから>

Parzival 174,22 sin jugent het ellen unde craft
 <彼の若さは勇敢な心と優れた力を持ちあわせていた>

Tristan 7006 dô wuohs im muot und ellen
 <その時彼に決意と勇氣が湧いてきた>

küene は「Das Nibelungenlied」で非常に多くの用例を擁し、その多くが勇士を示す名詞およびその固有名詞に伴い、勇猛さを強調している。宮廷叙事詩人においても形容詞 küene は勇士の「勇猛果敢な」心をあらわし、Wolfram で多くの用例を見ることができる。

Iwein 7000 f. daz er getar unde kan / baz vehten danne ein küener degen
 <彼(臆病者)でも勇敢な勇士より立派に闘う勇氣を得、実際に戦うことができる>

Parzival 26,12 der helt was küene unde wis
 <この勇士は勇敢にして賢明であった>

Tristan 251 f. des libes schoene und wunneclich, / getriuwe, küene, milte, rich
 <体は美しく、みごとで、誠実にして勇敢で、物惜しみせず、富強——であった——>

ellenthaft (力強い、勇敢な), künne (一族), ecke (剣の刃) の各単語は Gottfried ではもはや使用されることがなく, dürkel (孔だらけの) に関しては Wolfram 以外の宮廷叙事詩人でその用例を見ることができない。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
⑬ ellenthaft	6(0)	3(0)	1(0)	0	0	21(1)	0
⑭ künne	7(0)	4(3)	1(1)	4(3)	0	10(4)	0
⑮ ecke	7(0)	1(0)	0	0	0	4(1)	0
⑯ dürkel	3(0)	0	0	0	0	11(0)	0

ellenthaft は「Das Nibelungenlied」における 6 例中 4 例で hant (nhd. Hand) とともに用いられ、「勇敢な手(勇敢な人)」をあらわすほか, muot, kraft とともに「勇氣」「勇力」をあらわしている。Hartmann でも ellenthaft は 3 例で hant とともに、そのほか 1 例で muot とともに用いられる。これに対して Wolfram は, wer (防備), sin (思慮), her (軍勢), swanc (武器の打ち振るい), leden (命), jagen (追撃), degen (勇士) など様々

な名詞と結びついて広く用いられている。

Parzival 263, 4 f. und manec ellenthafter swanc, / die begunden verre gleston
 <そして何度も力強く打ちおろされる武器, これらが遠くまで輝いた>

künne は Wolfram のほかに, Hartmann でも「Iwein」以外の作品で用例を見ることが
 できるが, ここではその多くが押韻語として用いられている。

Der arme Heinrich 655 f. unsers libes wünne, / ein bluome in dinem künne
 <わたしたちの喜びであり, お前の一族の花——であって欲しい——>

「剣の刃」をあらわす ecke は, 宮廷叙事詩では Wolfram および Hartmann の「Erec」
 においてわずかに見られるにすぎない。

Parzival 253, 27 Sin ecke ligent im rehte
 <その(諸刃の剣の)両方の刃は均整がとれている>

dürkel は「Das Nibelungenlied」では戦いによって「孔のあいた」楯や兜を形容するが,
 Wolfram ではこれに限らず「力」, 「心」, 「悔悟」, 「喜び」とも結びついて用いられる。

Parzival 601, 16 des mîn dürkel vröude werde ganz
 <それによってわたしの孔だらけの喜びがすっかり癒される という…
 …>

3 Wolfram はいわゆる古語を押韻語としても積極的に利用している。balt (大胆な),
 dagen; gedagen; verdagen (黙る), gemeit (はつらつとした, 喜びにあふれた, 愛らし
 い), rant (楯<の縁>)の各単語は, すでに「Das Nibelungenlied」において押韻語として
 用いられているが, 宮廷叙事詩人においても, Gottfried 以外の二人の詩人, Hartmann, 特
 に彼の初期の作品において, そして Wolfram で引き続き押韻のために利用された。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
⑰ balt	14(13)	3(3)	0	0	0	23(23)	0
⑱ (ge-, ver-) dagen	23(21)	26(26)	4(4)	1(1)	10(10)	16(16)	0
⑲ gemeit	46(46)	9(9)	0	1(1)	0	10(10)	0
㉑ rant	23(23)	4(3)	0	0	0	4(3)	0

balt は多くの場合, 付加語形容詞として「勇士」などの名詞の後に置かれる。Wolfram
 ではこのほかに「〜に熱心な」, 「〜に夢中の」の意味でも用いられる。

Parzival 339, 15 f. sus reit der werde degen balt / sin rehte strāze ûz einem
 walt
 <こうして立派で雄々しい勇士は森から彼の道をまっすぐ馬をすすめて
 行った>

Parzival 117, 7 f. Sich zôch diu vrouwe jâmers balt / ûz ir lande in einen walt
 <悲嘆にくれた女王は彼女の国を離れ森へ入った>

dagen とその派生動詞 gedagen, verdagen は, Mhd. においてすでに古風な単語とうけ

とられているが¹²⁾、押韻語として Hartmann の全作品および Wolfram で広く用いられている。

Erec 44 f. daz getwerc enwolde ir niht sagen / unde hiez si stille dagen
 <矮人は彼女に何も話そうとせず、彼女に口を閉ざして黙っているよう命じた>

Parzival 562, 9 f. al die dâ wâren, clageten: / wênc si des verdageten
 <そこに居合わせた人々は嘆き悲しみ、皆そのことをこらえることはなかった>

gemeit は「Das Nibelungenlied」では多くの場合、勇士、騎士とともに「天晴れな」、「勇ましい」、「はつらつとした」の意味で用いられている。しかし、このほかに「喜びにあふれた」、「愛らしい」、「美しい」の意味で用いられた 4 例も見ることができる。Hartmann では特に初期の「Erec」で広く用例を見ることができるが、彼においては、もはや古風な「天晴れな」、「勇ましい」、「はつらつとした」の意味の用例は見られない。Wolfram においても、この古風な意味を持った用例は 2 例にすぎず、8 例において「喜びにあふれた」、「愛らしい」、「美しい」の意味で用いられている。

Nibelungenlied 2304, 3 f. ir geltet mîniu leit. / ir habt uns hinne erbunnen vil maneges recken gemeit

<そなたはわたしの悲しみを償うのだ。そなたはこの中で、わたしたちから多くの天晴れな勇士を奪い去った>

Erec 12 f. eine juncvrouwen gemeit, / schœne unde wol gekleit

<一人の愛らしく、美しく、そしてみごとに着飾った乙女>

Parzival 318, 25 f. diu maget trûrec, niht gemeit, / ân urloup von dem ringe reit

<悲しみに沈み、喜びに浸ることのない乙女は、別れの挨拶もせずに円陣から馬で立ち去った>

rant は多くの用例で schilt (楯) の二格と結びつくか、または単独で用いられ「楯」を意味する。この場合 rant は押韻調整の手段と考えられる。この単語の用例は、宮廷叙事詩人においては Hartmann の「Erec」と Wolfram で見られ、Wolfram の押韻語とならない 1 例で「楯の縁」を意味するのに対して、彼の他の 3 例では「楯」を示している。「Erec」ではすべての用例で両者いずれの解釈も可能となっている。

Erec 8964 f. sinen helm er abe bant / und sturzte in ûf des schiltes rant
 <彼は兜の紐を解きほどいてそれを楯<の縁>にかぶせた>

Parzival 478, 23 f. des wart von siner clâren hant / verdürkelt manec schiltes rant

<そのため、彼のみごとな手によって多くの楯が突き破られ、孔だらけになるはめとなった>

一方、民衆叙事詩における意味が宮廷叙事詩で変化、発展していくことばで、古い意味の単語が、宮廷叙事詩人によって押韻語として利用される例も見られる。snel (勇ましい、強い)、mære (音にきこえた、名高い) は「Das Nibelungenlied」では特に押韻語として利

用された単語ではないが、この古風な意味をもつことばは宮廷叙事詩人では Wolfram を中心に押韻のために利用されている。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
② snel	68(1)	0	0	0	0	13(11)	0
② mære	6(0)	0	4(4)	0	2(2)	10(10)	3(3)

「勇ましい」、「強い」の意の snel は、宮廷叙事詩人ではすでに古風なものとして¹³⁾、これを特に押韻語として利用した Wolfram 以外では避けられている。

Parzival 354, 19 f. durch den kômen zwên ritter snel, / der werde künec Schirniel

＜彼のために二人の勇ましい騎士がやって来た。身分高き王シルニールと……＞

snel は本来、包括的な意味を有し、「Das Nibelungenlied」ではこのほかに4例（押韻語0）で「速い」、「素早い」の意をあらわしているが、Wolfram ではこれをさらに発展させ、ほかに35例（うち押韻語19例）もが「速い」、「素早い」、さらに「熱心な」、「切望した」の意味で用いられている。Hartmann もこの単語を「速い」、「素早い」および「熱心な」の意で3例（うち押韻語1例）、Gottfried は「速い」の意で1例（押韻語）用いている。

Iwein 2126 f. sô snel ist dehein man / noch niht âne gevidere

＜翼もなくてそんなに速く走れる人は未だ存在しない＞

Parzival 324, 22 ist hêr Gâwân lobes snel

＜ガーヴェーン殿が榮譽を切望されるのなら＞

mære に関しても「音にきこえた」、「名高い」の意味は13世紀になると古風なものとなり¹⁴⁾、その用例も多くは見られないが、Wolfram のみならず、Hartmann や Gottfried においてもこの古いことばは押韻語としてのみ用いられている。

Tristan 477 f. das Marke der mære / ze Tintajêle wære

＜高名なマルケ王がティンタイェールにおられるということ＞

このほか mære は、snel と同様、意味上の色付け、変化によって「大事な」、「好ましい」の意味をとり、Hartmann の「Erec」で6例（うち押韻語4例）、「Iwein」で1例（押韻語）、さらに Wolfram で1例（押韻語0）、Gottfried で2例（うち押韻語1例）の用例を見ることができる。

Erec 708 f. ob iu wære / der lip zihte mære

＜もしそなたにとって命が少しでも大事ならば＞

このほか古風なことばとして、Hartmann, Gottfried はもちろん、「Das Nibelungenlied」でも用例の見られない wal（戦場）が、Wolfram で3例、「Parzival」と韻を踏んで用いられている。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
㊸ wal	0	0	0	0	0	3(3)	0

wal は、バルツィヴァールの妻となるコンドゥヴィーラームールスの国の都ベルラベイルの城門の前の戦場をさし、いずれも第四巻にあらわれる。

Parzival 210, 27 f. ûz kom geriten Parzivâl / an daz urteilliche wal

<バルツィヴァールは神の審判をうけるべく戦場へと——城の中から外へ——馬を進めた>

4 Wolfram のいわゆる古語に対する肯定的な姿勢に比べて、Hartmann および Gottfried はこれに否定的に対処している。しかし彼らのうちで特に、これらのことばに対して最も厳格な拒否的態度をとった Gottfried において、古風なことばが詩人の表現法の中に積極的に組み入れられた例も見られる。veige (死ぬべき運命の), stolz (誇り高い), urliuqe (戦い), wic (戦闘) は、いずれも古風な語感から、特に Hartmann で使用が控えられているのに対して、彼以外の宮廷叙事詩人、とりわけ Gottfried において特徴的に用いられている。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
㊸ veige	5(0)	0	0	0	1(0)	3(3)	21(0)
㊸ stolz	18(0)	1(0)	0	0	0	49(4)	11(0)
㊸ urliuqe	3(0)	1(0)	3(0)	0	0	5(0)	8(0)
㊸ wic	1(1)	0	0	0	0	4(4)	5(0)

veige (死ぬべき運命の) は古風なことばとして、Wolfram で押韻語の3例が、Hartmann では「Iwein」の1例が見られるにすぎないが、Gottfried においては21例中18例でこの古い意味から発展した「呪わしい」、「いまましい」の新しい意味を見ることができる。

Parzival 558, 15 f. ob daz got erzeige / daz ir niht sit veige

<神がみ心を示され、あなたが無事死なずにすむならば>

Tristan 7835 sô smacte ie der veige slac

<呪わしい太刀打ちによる傷がたえずにおい続けた>

stolz は古風なことばとして「誇り高い」勇士を形容し、Wolfram でもこれが彼の表現法に適う単語であることから広く利用されている。これに対して Gottfried では、この単語の古風な意味を「気品のある」女性に対する修飾語に発展させ、11の用例中7例で、イゾルデの身分高き侍女であり、常にトリスタンとイゾルデの間に立って彼らにつくす、「気高き」ブランゲーネを形容することばとして、また2例で、金髪のイゾルデと同名の白い手のイゾルデを修飾することばとして用いられている。彼において stolz が、「誇り高き」騎士を示す用例は1例見られるにすぎない。このことは Wolfram で用いられたこの単語が49例中わ

ずかに2例において「気高き」婦人を形容するのと対照的である。

Parzival 48, 17 dô sprach der stolze degen junc

<そこで誇り高い若き勇士は言った>

Tristan 10358 f. Ie mitten kam Brangæne / diu stolze, diu wise

<その間に気高く、聡明なブランゲーネがやってきた>

上記の二つの単語が古風な意味の発展的变化によって Gottfried の表現法に適用されたのに対して, urliuqe, wic の「戦い」をあらわす単語は, Gottfried において古風な意味を保持したまま, 他の宮廷叙事詩人と比べてより積極的に用いられている。urliuqe は中世盛期の宮廷詩人の時代にはすでに古風なものとして扱われ, 中世末には消滅した¹⁵⁾。また wic は「Das Nibelungenlied」でも古風なことばとして1例の押韻語にその用例が見られるにすぎず¹⁶⁾, Wolfram においてももっぱら押韻のために利用されているだけである¹⁷⁾。

Tristan 368 hie mite sô gânt urliuqe hin

<戦いというものは, こういうことを繰り返していくものである>

Parzival 43, 1 f. unde ein swert daz Razalic / durch ellen brâht in den wic

<そしてラツァリックが勇敢な心を示すために戦闘に持参した一振りの剣を……>

Tristan 6405 nû habet ir mir wic vür geleit

<今そなたはわたしに戦いを挑んだのだ>

このほか古風な形容詞 vrävel (勇ましい, 大胆な) のように, 「Das Nibelungenlied」ですでに使用例を見出せない単語が, 用例数は少ないものの, Hartmann において特徴的に用いられている例も見られる。

	Nib.	Erec	Greg.	A. H.	Iwein	Wolfr.	Gottf.
⊗ vrävel	0	0	2(0)	0	1(0)	4(1)	0

vrävel は Wolfram では「勇敢な」勇士, 騎士を形容しているが, Hartmann では「大胆不敵な」および「Iwein」における「思いあがった」, 「厚かましい」の意味で用いられる。

Iwein 4585 dô bat er als ein vrävel man

<そこで彼, この思いあがった男は自分の願いを言った>

Parzival 49, 13 die vrävelen helde sint nu dîn

<勇敢なる騎士たちは今やそなたのものだ>

5 以上, 中世盛期の宮廷叙事詩人 Hartmann, Wolfram, Gottfried の古風なことばに対する態度を, それぞれの用例の統計にもとづき, さらに民衆叙事詩「Das Nibelungenlied」におけるそれと比較することによって検討してきた。その結果, 宮廷叙事詩人におけるいわゆる古語の扱いについて, 次のようにまとめることができる。

中世盛期の宮廷叙事詩人は, 武器や武勇を示す領域の単語を中心に, 民衆叙事詩で広く用いられた特定の単語を, 宮廷的な表現法にそぐわない古風なことばとして, 使用を避ける態度を示している。しかしこの態度は決して一様ではなく, ここに宮廷叙事詩人としての統一

的傾向を見ることはできない。ここで取り扱った単語のうち、三人の宮廷叙事詩人によって共通に忌避された単語はわずかな数にすぎず、多くは各詩人によって異なった扱いをうけている。Wolfram は他の二人の詩人たちが古風なことばとして使用を控えた単語を、自分の表現法に広く取り入れ、むしろこれを発展的に使用している。また彼は押韻語としてもこれらの単語を積極的に利用する。Hartmann の言語芸術は常に発展し、「Iwein」において完成するのであるが、彼は特に「Iwein」において、これら古風なことばの使用を控える態度を示している。この拒否的態度は Gottfried において最も厳格に示される。その反面 Gottfried においても、いわゆる古語を自分の表現法に積極的に、あるいは発展的に取り入れた用例も見られる。これらの検討結果に、さらに、例えば *recke*, *degen* のような単語が中世後期の叙事詩で再び広く用いられること¹⁸⁾、そのほかにもここで取り扱った単語の多くが中世盛期の宮廷詩人以外で、さらにそれ以降の詩人において使用された、もしくは使用されたと考えられること¹⁹⁾を加えて考察すると、ここで取り扱った単語の多くを一概に中世盛期における、またはこの時代の宮廷叙事詩人たちにおける古風な (*altertümlich*) ことば、古語 (*veraltete Wörter*) とみなすことは不可能である。民衆叙事詩で広く用いられたこれらのことばは、中世盛期の宮廷叙事詩では、両者の題材と形式の相違から、使用が控えられる傾向にあったが、その反面、これらのことばは、詩人の表現法に取り入れられ、その詩風の中に生かされることにより、生命力を保持でき、あるいは、むしろ新たな生命を獲得することができた。以上の点からわれわれは、宮廷的 (*höfisch*) という形容詞で統一される中世盛期の宮廷叙事詩人の詩の形式と表現法が決して一様ではなく、むしろそれぞれ異なる特徴的なものであったと指摘することができよう。

註

- 1) Adolf Bach: *Geschichte der deutschen Sprache*, 8. Aufl. Heidelberg 1965, S. 206 ff.; Hugo Moser: *Deutsche Sprachgeschichte*, 5. Aufl., Tübingen 1965, S. 123 ff.; Hans Eggers: *Deutsche Sprachgeschichte II*. Hamburg 1965, S. 110 ff.; Fritz Tschirch: *Geschichte der deutschen Sprache*, 2. Teil, 2. Aufl., Berlin 1975, S. 87 ff.; Peter von Polenz: *Geschichte der deutschen Sprache*, 9. Aufl., Berlin-New York 1978, S. 53 ff.; Norbert Richard Wolf: *Geschichte der deutschen Sprache Bd. 1*, Heidelberg 1981, S. 179 ff.; Werner Besch, Oskar Reichmann, Stefan Sonderegger: *Sprachgeschichte, ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*, Berlin-New York 1985, S. 1123 f. u. S. 1968 f. u. a. m.
- 2) Helmut de Boor (Hrsg.): *Das Nibelungenlied nach der Ausgabe von Karl Bartsch*, 22. Aufl., Mannheim 1988.
- 3) Hartmann von Aue: *Erec*, hrsg. von A. Leitzmann, 5. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1972.
- 4) Hartmann von Aue: *Gregorius*, hrsg. von H. Paul, 12. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1973.
- 5) Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*, hrsg. von H. Paul, 14. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1972.

- 6) Hartmann von Aue: Iwein, hrsg. von G.F. Benecke u.K. Lachmann, 7. Aufl. neu bearbeitet von L. Wolff, Berlin 1968.
- 7) Wolfram von Eschenbach: Parzival, 7. Ausg. von K. Lachmann besorgt von E. Hartl, Berlin 1952.
- 8) Rüdiger Krohn (Hrsg.): Gottfried von Straßburg: Tristan, nach dem Text von Friedrich Ranke, Stuttgart 1981.
- 9) N.R. Wolf: a.a.O., S. 224.
- 10) Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, 21. Aufl., Berlin-New York 1975, S. 302.
- 11) N.R. Wolf: a.a.O.
- 12) Marta Marti (Bearb.): Wolframs v. E. Parzival und Titurel, hrsg. von K. Bartsch, 4. Aufl., 1. Teil, Leipzig 1935, S. 284.
- 13) Ebd., S. 64.
- 14) Helmut de Boor: a.a.O., S. 70.; Ernst Martin (Hrsg.): Wolframs v. E. Parzival und Titurel, 2. Teil, Kommentar, Darmstadt 1976, S. 140.
- 15) Marta Marti: a.a.O., S. 54.; Ernst Martin: a.a.O., S. 186.; Rüdiger Krohn: Gottfried von Straßburg: Tristan, Bd. 3, Kommentar, Nachwort und Register, S. 27.
- 16) Helmut de Boor: a.a.O., S. 283.
- 17) Marta Marti: a.a.O., S. 55.; Ernst Martin: a.a.O., S. 54.
- 18) N.R. Wolf: a.a.O.
- 19) Ebd., S. 225.